

追悼

永安先生の思い出

望月 幸義

永安幸正先生とは、同じ昭和十六年一月の生まれで、同年齢であったこともあって、親しみを感じていました。初めて先生にお会いしたのは、はつきり覚えていませんが、三十年ほど前のことだったと思います。確か先生は、高崎経済大学で教鞭を取っておられました。すでに著書も数冊出されていましたので、凄い先生だと思っていました。そんなこともあって、何の抵抗もなく、いつも永安先生と呼んでいましたが、先生にとっては、同輩なのに先生と呼ばれることに違和感を感じたのでしょうか。何回か先生と呼ぶのを止めて欲しいと言われたことがあります。しかし、一度も改めませんでした。私にとって一番自然な呼び方だったからでしょう。

それから直ぐに早稲田大学の教授になられました。この頃から、研究部の研究員を兼ねるようになり、頻繁にお会いするようになりました。

永安先生は、頭脳明晰で学識が広く、深く、私などは、とても及ばない力を持っている人だといつも尊敬していました。物事を総合的に捉え、それを図示する優れた能力を持っていました。

専門は、経済哲学でありましたが、専門に捉われず、幅広い研究をしていました。一時マルクス主義の研究もしたことがあったようです。今では珍しいことになりましたが、当時の知識人なら、普通のことです。哲学の研究は深かった。アリストテレス、プラトン、トーマス・アクイナス、カント、ヘーゲル、ミル、アダム・スミスなど、誰についてもよく知っていました。

先生は、専門の経済学の書物ばかりだけではなく、哲学、政治学、法律学、教育学、社会学、心理学など、あらゆる分野の本を読んでいた。そのことに驚かされたことを覚えています。もしあまり読んでいない分野があるとすれば、文学、芸術方面だったでしょう。

モラロジーについても、幅広く、深い知見をもっていました。そのため先生の遺著ともいえるべき『モラロジー概論』がまとめられ、読まれるようになったことは、先生も草葉の陰で喜んでいました。これを作る際、いろいろと議論をしましたが、他人の考えでも、良いと納得したならば、積極的に採用してくれました。

研究部での活動の中心は、経済・経営と道徳の研究でした。永安先生が関係した成果は、たくさんありますが、『モラロジー経営の指針』、『モラロジー経営原論』などです。経済倫理関係の書物もあります。又、私が本を作成するにあたって、貴重な意見をたくさん寄せて下さいました。

先生は、いろいろと文章を書くことが多かったためか、良い文章を書けるようになるための工夫を凝らしていました。

先生の勉強振りに、驚かされた私は、ある時、「どうやって勉強するのですか」と尋ねたことがあります。正確な言葉は忘れましたが、布団に寝ないこともよくあったということでした。夜も昼もなく、勉強に打ち

込んだのでしよう。晩年、病気になられた時、若い時の無理が災いしたのではないかと思ひ、残念なことをしたと悔やまれます。

親しく交際するようになってから、先生とは、よく議論しました。最初の頃は、議論の途中で、何々の本を読んだか、と言われ、読んでないと答えると、それではお話にならないということになって、終わってしまふことが、しばしばでありました。

そのうち、私も自分の意見をはっきり出すようになりました。そして、先生とは、激しく議論することが多くなりました。議論の行き着く先は、いつも同じ問題になりました。それは、先生は、科学主義・客観主義の立場であり、私は、主観主義の立場でした。お互いに自分の立場の正当性を譲りませんでした。先生は、同じ問題になると分かっていたのでしようが、私との議論を好んでいたようです。日ごろから、徹底的に議論することの重要性を主張してました。また、極端に異なる意見のほうが発せられることが多かったからでしょう。先生は、よくメモを取ってました。病気をするようになってから、議論を好まなくなつたように思われるのですが、私だけのことでしょいか。

先生は、常にアイデアを求めていました。その態度が随所に見られました。メモを頻繁にするとか、討論することを好んだこともその現われといえるでしょう。その結果、いろいろなアイデアを具体化してました。

何と言つても、永安先生と親しく交流させてもらったのは、囲碁を通してでした。残念ながら、初めから今日まで先生のほうが一枚上で、先生が五段で、私は三段位でした。最後には、私が四段になりましたが、遂に先生を超えることは出来ませんでした。それでも近くに同じ位の人がいなかったので、暇を見つけて

は、よく指しました。囲碁を始めたのは、二人とも大学生の頃からでしたが、先生の学び方は本格的で、元プロ棋士の指導を受けていました。また、街の碁会所の会員になってよく勉強していました。先生からの点でも、大いに学びました。先生と最後に打ったのは、最初に病気になった三年ぐらい前だったと記憶しています。それから、時々、そのうち一局やりましょうと言っているうちに、果たさず永遠の別れと成ってしまいました。そのうち手合わせをお願いしたので、碁盤を用意して、待っていて下さい。

永安先生が亡くなって、一年数ヶ月経ちました。同年輩の人が亡くなると、自分もそんなに長くないという気持ちになります。特に、私も三年半前に脳内出血に罹り、その後遺症がなかなか治らないので、余計にそういう気持ちになるのかも知れません。

今、勉強中の吉田松陰は、三十歳で獄死していますが、彼は、長く生きていることが重要ではない、何をしたかが問題であると言っていますが、この意見には、賛成も反対もできず、迷っています。いずれにしても、人生長いようでもあり、短いようでもあります。最近、死の問題が切実に思えてきました。

先生は人を育てる力を持っていました。アルバイト学生を雇ったり、よく学生に仕事を手伝わせて、その学生の研究上の指導や進路の助言などをしていました。特に、永安先生の助言でインドへ留学した人は、少なくありません。また、研究部内でも、多くの人に翻訳してもらい、五冊ほどの名著を翻訳しました。ピーチャムの『生命倫理』やエチオニアの『新しい黄金律』などです。

先生は、研究費はたくさん使用しました。以前は、少し使い過ぎではないかと思っていました。このころでは、研究費が多いことは重要なことであると分かりましたし、有難く思っています。

永安先生のこと、一つ思い出すことがあります。それは、いつも筆を使って、いろいろなことを書いて

いたことです。普通の人ならば、ボールペンで書くところを筆を使うのです。なぜそうするのか、いつか聞いてみたいと思っていました。果たせませんでした。多分少しでも字が上手になろうとしていたのではな
いかと推測しています。

こんなに早く亡くなってしまふなら、生前に、もう少し情報交換をしておけばよかったと思っています。
どうか安らかにお眠り下さい。